

第3回四国圏広域地方計画学識者会議

議事要旨

平成21年5月28日（木）10:30～12:00

高松サンポート合同庁舎低層棟2階アイホール

1. 開会

○四国圏広域地方計画推進室長（油谷）

予定の時刻より少し早いですが、お揃いでございますので、只今から第3回四国圏広域地方計画学識者会議を開催させていただきます。委員の皆様方にはご多忙のところご出席を賜り、誠にありがとうございます。本日の進行役を務めさせていただきます、四国圏広域地方計画推進室長の油谷でございます。よろしくお願いいたします。

なお、本日の会議も報道関係者には公開としておりますので、よろしくお願いいたします。それでは、お手元の議事次第により進めさせていただきます。

なお、委員の皆様のご紹介は、お手元の委員名簿と配席図にて代えさせていただきます。また、本日欠席されている先生方には、後日事務局の方から情報の提供をさせていただきますと考えております。

それではまず始めに、四国圏広域地方計画協議会の会長代理であります木村四国地方整備局長から一言開会の挨拶をさせていただきます。

○四国圏広域地方計画協議会会長代理（木村）

おはようございます。整備局長の木村でございます。

本日はお忙しい中、井原先生を始め先生方にお集まりいただきまして本当にありがとうございます。おかげ様でこの学識経験者の会、3回目を迎えました。これまで幅広くご意見をいただいたわけでございますし、そうしたご意見も踏まえて、さらにこの広域計画というのは計画の作成、プロセスが重要だと思いますので、そういう意味では各自治体とか、あるいは県とか、あるいは関係団体から幅広く意見をいただいて、何とか今日お話しさせていただきます広域地方計画の原案を作成することができました。近々これに基づいて、パブリックコメントを行いたいと思っておりますし、また全体の協議会をこの6月8日に開かさせていただきます。それから中国圏との連携ということでございますので、7月8日には中国圏と一緒に合同の協議会を開かさせていただきます。ということで、いよいよ広域計画も最終段階に入ってきたということでございます。

本日お集まりいただきました先生方におきましては、今日この原案を見ていただいて専門的な立場からご意見を賜りたいと思っておりますし、また計画を作ってそのまま終わりではございませんので、むしろこれをどうやって進めていくかがもっと大きなポイントだろうと思っております。そういう意味ではこの計画の進め方について、あるいは進行管理についてご意見を賜ればと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

我々としましては、こうした広域地方計画に基づいて、より元気のある四国を目指して関係機関とも引き続き調整、連携を図ってまいりたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。以上でございます。

2. 議事

1) 四国圏広域地方計画 計画原案について

○四国圏広域地方計画推進室長（油谷）

それでは、これより議事に入りたいと思います。これからの進行につきましては、座長の井原先生にお願いしたいと思います。井原先生よろしくお願いたします。

○井原座長

かしこまりました。議事運営を担当させていただきます。

まず、お手元の議事に沿って進めてまいりたいと思います。四国圏広域地方計画計画原案ということについて、委員の方々へあらかじめ意見の照会をしておりますが、事務局の方からその概要等の説明をお願いしたらと思います。

○事務局

[事務局より四国圏広域地方計画計画原案について説明]

○井原座長

はい。どうもありがとうございます。

只今事務局の方からあらかじめ委員の皆様方にご紹介をした結果を踏まえて、その意見の集約をまとめてご報告いただきました。これを受けてこれから委員の皆様方から忌憚のない率直なご意見を承りたいと思います。この会議は学識者会議ということで、このメンバーの学識が問われているということを忘れないようにしていただいて、既にこの種の議論というのは色々な意見が出てくると思います。最終的には全く対立するような意見も出てくると思いますが、それを最終的にどうやって集約するかということが知恵の見せ所であります。それともう1つは、地域特性といえますか、これは全国的な国土形成計画のもとで各地域毎に如何にその特徴づけ、キャラクター化を図るかということがありますので、北海道・九州あるいは東北等を念頭に置きながら、四国ならではの四国の地域特性をいかに四国の住民だけではなくて、全国の人にも四国に習いなさいとか、新しい先例をつけるような、冒頭事務局からお話がありましたように、全国に先駆けたモデルと言いますか、そういう理念も問われているので、そういう点では私は学識者という名前にこだわりますが、非常に重たいので、是非委員の皆様方からのご意見を承りたい。そこで、ポイントになるのはむしろ色々な反対意見があったほうがいいのかと。お互いに相互理解が深まるだろうと。今までは各単独に出てきたことを事務局の方でとりまとめいただいて、広域プロジェクトあるいは各圏域との連携という形で集約させていただいたわけですから、もう一度一堂に会して率直な意見の交換をしていただけたらというのが、座長役のお願いでございます。ただ、時間制約がございます。今日は遅くても12時には終わりたいと思いますので、限られた時間制約、一人3分ぐらいですか。それで言葉を選んで所見の披露をしていただけたらありがたいと思います。どういう点でも結構ですので、是非ご意見をお寄せ下さい。

どなたからでも結構ですから。最初事務局の方でも説明があった中橋さんですね。中橋さん、明るい話をお願いします。

○中橋委員

はい。第1回目の時にも言ったかと思うんですが、学識者ではないですけど生活者としては多分皆さんの中では一番地に足のついた生活というか、毎日今日は卵はいくらかも知って生活してる者かなと思います。人と文化を育むというところで少し意見を言わせていただきましたが、全般にわたって今日ご報告をいただいて、やはりハードを整えつつ、人がどうやって交流していくかということで、その人の心を動かす部分がポイントになってくるのかなと思います。

私ども活動しながら感じていることは、香川県出身の中で高校を卒業して、大体8割ぐらいの

人たちが県外の大学に出て、東京・大阪などの大学に行って、就職で帰ってくる人たちが6割ぐらいということで、高校を卒業して約半数の人たちが、もう外に出っぱなしになっています。でも、帰ってくる人の割合は女の子の方がやはり高いということで、東京や大阪で出会っていい男の子を連れて四国に帰ってくる魅力ある町にするためどうしたらいいのかっていうことで、私は次世代育成支援が大事だと考え色々な委員会等に係らせていただいています。これから子供を産む親になる人たちの人口が増えれば、四国の子供が増えて元気な町ができるのではいうことで、とにかく外から若い人たちが呼び戻ってくるようにということの活動している中で、この間も小豆島や直島などのところに、ITの仕事をしている都会の若いカップルが帰ってきて、それぞれブロードバンド化していればどこで仕事をしていても、東京で仕事しても香川で仕事しても同じだ。あるいは、週に2日だけ東京に行って仕事をして、あとは香川で仕事をして生活ができるというようなスタイルでやっているカップルが何組かいて、非常に新しい形なんだなと思いました。そういう意味では東京、大阪、福岡などアクセスがしやすいということであるとか、インターネット環境が整っているというようなこと。あるいは、働く場が四国にあるということが魅力に繋がってくると思いますので、漠然とした意見しか言えませんが、そういう魅力をどんどん発信できればいいなと思いますし、こういう会議の結果をとにかく若い人たちに知ってもらおう。あるいは、女性の人たちにもここでまとまったことを見ていただく機会ができて、若い人たちが外に出た時に、四国にはこういうものがありますよということと言えるように、今日この内容というよりも、この結果をどのように使っていくとか、PRしていくのかということが、とにかく女性の中に落ちていけばいいなということをととても感じました。

○井原座長

どうもありがとうございました。あと冒頭、局長のご挨拶にもありましたが、計画原案そのものだけではなくて、進行管理とか、どういう形で周知徹底を図るかということもありますので、是非また後でご意見をお寄せ下さい。

それでは、豊田先生の方から先をお願いします。

○豊田委員

大変苦勞してとりまとめていただいかと存じますが、ここでは少し基本線の確認をしたいと思います。現在、地域の社会や経済を取り巻く問題点は大きく3つあります。第一は、かつてない人口減少社会を迎えていること。第二は、財政状況が逼迫しており、昨年来からの経済危機がこれに追い討ちをかけていること。第三は、地球環境問題が深刻化する中、低炭素社会の実現が求められていることです。今回の国土形成計画の冒頭部分では、「これまでの『開発』を基調とし量的拡大を図る計画から、国土の質的向上を図るため『利用』と『保全』を重視した計画への転換を図る」という基本目標が打ち出されています。こうした認識自体、三つの危機の深まりの表れでもあり、政策転換として大きな意義があるでしょう。要は、これをいかに具体化するかです。そのためには、インフラなど既存ストックの有効活用が課題となると思います。量的拡大に当たる施策についてはもう十分書き込まれていると思いますので、「利用と保全」という点について2点指摘させていただきます。

第一に、今後の社会資本整備は開発から維持管理へシフトする必要があります。プロジェクトNo.5には、「社会資本の高齢化に対応した適切な維持管理等により、施設の長寿命化を推進する」と記されています。道路の補修、橋梁の強化など、既存施設のメンテナンスコストは今後ますます増加していくと見込まれます。こうした事業は国土計画として地味かもしれませんが、非常に重要だと思います。もちろん、これらは所管する自治体や出先機関の仕事という部分も多いでしょうが、現場では新規の予算をつけにくい状況にあると聞いています。ですから、大きく言えば財源委譲といった制度改革を含め、社会資本整備における「利用と保全」の仕組みづくりを十分検討していただきたいと思います。

第二は、将来に向けて都市の構造を見直す必要があります。「新しい国土像実現のための戦略的目標」では、人口減少社会において持続可能な地域をつくるため、「集約型都市構造への転換」という目標が示されています。しかし、実際には規制緩和でどんどん郊外で無秩序な開発が進ん

であり、それが地域の発展だと勘違いしている人が未だに多いわけです。行政、経済界、市民いずれをとっても、都市構造の集約化に対する関心や意識が低いことが大きな問題だと思います。これまでの研究の知見として、都市の低密度化は社会資本の投資効率を低下させますし、過度に自動車に依存した社会は高齢者にとって暮らしにくく、二酸化炭素の排出量も増大します。また、都市化によって優良農地が転用されると、食料自給率を押し下げることにもなりかねません。例えば、現在福島県では、「商業まちづくり条例」で大型店の郊外立地を規制したりしています。一方香川県では、土地利用規制の歪みを正すという目的で、全県で線引き廃止した結果、旧市街化調整区域の開発が進んでいます。こうした事例をきちんと検証した上で、都市の郊外展開をどうコントロールするか、コンパクトシティへどう転換していくのか、議論を深めていくことが地域の再生を考える上で重要だと思います。

○井原座長

ありがとうございました。非常に重要な問題提起をしていただきました。これについてまた反論を始めたら1時間ぐらいかかりますので。あと一通り前置きなしに発言してもらって、後でまた議論をいたしましょう。実は線引き廃止の時、私も委員でして、今その後のフォローアップをしているところです。

それでは、坂本先生の方からお願いします。

○坂本委員

原案を拝見させていただきまして、非常にトータル的に絵が上手く描かれていますし、全ての項目が盛り込まれていると思います。私はこの原案を見ていて、一番これが今後の議論になると思いますけど、69ページ以降の「計画の推進に向けて」です。たぶんこの話に関しましてはこの次の議題であると思いますからそれは置いておくとして、全体的にこの原案を見ていて、私は今進めている「情報通信環境の整備とその利活用」というところをいろいろ考えているのですが、そこの活用の部分を、全てこの10プロジェクトにおいても、やはり十分に活用することによって多分実現できると思います。その部分が原案の中にはありますけど、この絵の方にはあまりそれが出てこない。それは、情報通信環境をいかに活用するかということは手段でありますから、目的とコンセプトに関してはあまり出てこないと思いますけど、やはりこれを実現する上ではICTをいかに活用していくか、例えば、先ほどのご説明の中では中山間地域を活性化する上でも中山間地域のブロードバンド、また安全・安心を確保する上で必要なことでありますし、また特に交通システムにしても、いかにもっと情報通信を活用できるのが課題です。それともう1つ、コミュニティです。それを是非考えて取り組んでいただければと思います。

先ほどもお話の中にありました、四国全体を検討して今後10年間このプロジェクトを動かしていくわけですが、それにはやはり側面から検討していくシンクタンクの機能のようなものが四国には必要だということと、もう1つ人材育成は、いつもうたわれていますけど、それを具体的にどういう人材をどうやって輩出していくのかという部分の仕組みをこれから考えていかないといけないと思います。

それともう1つは、他地域・他圏域とのネットワークというところで、一応、中四国等を考えられていますけれど、観光にしても例えば産業にしても都市部、特に東京・関西圏との連携というところも非常に重要でありますので、絵の中には中四国の絵しかなかったのですが、やはり東京等とこれからいかに連携していくのか、旬彩館は愛媛と香川が連携したアンテナショップという話もありましたけれど、そういうところで都市部といかに四国が連携して行って、四国全体を売り込んでいくかという仕組みをこれから考えていく必要性があると思いますし、是非、次のフェーズで議論します、「このプロジェクトにいかに関与していくか」、それがたぶん一番重要になっていくところではないかと思います。以上です。

○井原座長

ありがとうございました。これも非常に重要なことで、あとは広報活動だとか周知徹底を図る場合のIT化対応という点でどういうふうに活かすか。これは全国に先駆けて範を示せるような

何かそういうことができたなら非常におもしろいと思います。

次は近藤先生お願いします。

○近藤委員

はい。私も原案を読ませていただいて、色々なところでいい表現があるという印象を持ちました。特に 51 ページの中でプロジェクトをつくったときの留意点としていくつか項目が挙げられていますが、その中の 1 つで「計画期間内の効果の発現や実現が期待されること」ということが書かれていますね。これまで、この計画を見せていただいて、本当にこの原案については沢山のことが盛り込まれていますし、バランスもとれていると、私はそういう印象を持ちました。そこでこの表現がここにあるということは、その計画期間内にこのプロジェクトを、計画を達成するという強い意志が表れていると思います。やはり、現時点までは計画をつくるのがゴールだったと思いますが、これからはいかにこれを社会に実現していくかということがすごく大事です。そういう視点でずっとプロジェクトを見ていましたが、結果としてどうなっているか分かりませんが、それに向けてこれを進めていって欲しいと思いますし、まだその視点でもっと付け加えることがあったら、ご検討いただきたいと思います。

あと、議題の 2 番目の方でいくつか申し上げたいことがございますので、そちらに譲ります。

○井原座長

近藤先生は計画論の専門家なので、いくつか細かいこともあろうかと思いますが、また後では非フォローアップをしていただけたらと思います。

次は、川田先生お願いできますか。

○川田委員

私は前 11 月に見させていただいた時のプロジェクトは 14 プロジェクトだったのが、今回 10 に削減されてるということで。特に循環共生四国圏創造の問題で四国圏の整備体系の保全の問題とか、あるいは清流と潤いの水資源プロジェクト。これがどこかのプロジェクトに入ってるなという感じはしております。ですからいわゆるプロジェクト自体がどうこうということではありませんけれども、全体的にこういった循環共生の四国圏創造、あるいは清流の問題、さらに地域医療・子育て支援プロジェクトというのが、独立したプロジェクトとして当初は考えられていたわけですが、これがどこかのプロジェクトの中に入ってしまったということにおいて、基本的にこのプロジェクトは、何か産業をベースにしながら地域を如何につくっていくかというような位置づけに基本的にしているのではないかなという感じがいたしたわけです。八十八箇所文化、あるいは環境など、八十八箇所巡りの問題等も若干産業そのものではありませんが、若干環境産業と結びついておりますので、基本的に今回のプロジェクトは地域の四国圏の産業をどうつくり上げていくか。その中で環境に配慮しながらどうつくり上げていくかと。そういった基本的なスタンスで、このプロジェクトが構成されているのではないかなという感じがしておるわけです。それはそれで結構だと思います。それぞれのプロジェクトが環境に配慮しながら地域の資源を活用して、活性化をどう図っていくかということが一つの課題ですので、それで結構だと思いますけれども、そのことによって、本来もう少し大きく位置づけなければならない分野が若干少なくなっているのではないかなという面も現されております。例えば、目的・コンセプトか、アウトプット指標とか出てくるとは思いますけれども、そういった目的・コンセプトの中に、もう少しこういうように位置づけたらいいんじゃないかなという感じも私の感想として持っております。

それから先ほど近藤先生が言われましたように、1 つの目的を期間内に達成するというところで、基本的に数字の目的はないわけですので、どういうふうに四国圏の経済の各指標を、どういうふうに数字を設定するかということではありませんので、こういう問題について積極的に取り組んでいきますという考え方ですので、そういう意味では必ずしも数値として成果が上がるプロジェクトばかりではなくても、プロジェクトの中に重要に位置づけていけばいいのではないかなという感じがしております。あれもこれもというのはなかなか難しいですが、非常にこの 10 項目のプロジェクトはわかり易い形で整理ができたなと感じがしております。以上です。

○井原座長

どうもありがとうございました。それでは、柏谷先生をお願いします。

○柏谷委員

今日、このプロジェクトについていろいろお話聞かせてもらって、大変よくまとめられておられると思います。この広域地方計画は、やはり行政主体の広域計画であって、全国と総合比較されるわけでありますので、四国の特長を出さなければいけないということについては、よく特長も表れているのではないかと思います。ですから、この計画そのものについては、特にここをこう直してくれということはありません。しかしながら、行政と現実の経済社会とのずれというのはやっぱりあるわけでありまして、例えば端的に申し上げますと、一次産業の総生産額というのはだいたい2、3%位ですが、県庁内では、農林水産部は商工労働部よりももっと格が高くて人も多いというようなアンバランスがあります。そういう事情を考えるとやはりアウトプットの計画はこういうことになりましたが、いろいろこれから進めていくときに、四国といえども産業の生産額からみると三次産業が主体になっているわけですから、ここを強化しないとお金が出ていくということになります。確かに農業は、一次産業は全国的に見れば、相対的に強みがあると言われる。しかしこれは微々たるものにすぎない。それで、製造業も案外力があって、あるところに域際収支というどれだけそこでプラスのお金を稼げるかみたいなデータがありましたが、四国全体として意外とこれプラスなんです。だけど、四国全体は、産業的には総生産額で見たら大きなマイナスなんです。何が取られるかといったら商業と対事業所サービスでものすごいお金を取られているわけです。今後恐らく社会全体としては、そういう三次産業にさらに産業構造がシフトしていく。そして交通のバリアが減る。特に本四架橋が安くなるとますます全部取られていくわけです。そうすると四国は相対的に弱いところの農水産業が頑張ってみたりしても、結局はどんどん貧しくなっていくのではないかなということが気がかりになるわけです。ただ、それはここに出しにくいことですから、全般的にそういうことには気をつけていただきたい。それは先ほど坂本委員が言われましたように、やはり情報通信、ITをどういうふうにサービス産業の構造化に繋げていくかです。あるいは地域の若い人々、あるいは革新的なビジネスリーダーの意見をどういうふうに取り上げていくかというようなことを考えてみていただきたいと思います。

○井原座長

以上でいいですか。はい、どうもありがとうございました。

すごく貴重なご意見を拝聴させていただきました。それで、これから少し議論をしたいのですが、今、柏谷先生が言われたことで、農業は（農）産業構造の中だけでいいのか、農業を製造業だとかサービスのところまで持っていくと、アグリビジネスであるとか、そういうことが問題になってくるし、それでは産業構造とか産業分類がどうかということが気になります。それから本四架橋についてですが、四国はかつて島だったのが、本四3ルートができて、そのような状況のなかでこれからどうなっていくのかということが非常に大きな問題になるのではと思いました。そういう点で、もう一度全体をみたときに、この冒頭のタイトルが少し気になります。「四国圏広域地方計画 計画原案」というのは、いわば本のタイトルに当たるものです。この四国のサブタイトルというかキャッチフレーズとして、「癒やしときらり輝く産業のしま・四国の創造」とあります。その表現に少し違和感を覚えます。それは何故かということ、この「産業のしま」という意味についてなのです。それは、島だったのが本四3架橋によって島でなくなったと。いわゆる陸続きになって中国地方と合同で協議をするというときに、四国だけではなくて中国との連携がどうかという、そういうことを問われる時代になっている。それにも拘わらず敢えて島を強調して、四国全体が周囲を瀬戸内海・太平洋の海に囲まれているという島の特徴づけを意識的に強調することが私は非常におもしろいことだと思うのです。ところが、それが「産業のしま」といわれると、先程、川田先生も話されたように、どうも集約化のあり方で産業中心として四国をつくっていくような見方が強く出てくると、このなかの「産業のしま」の産業をどう理解したらよいか少し引っかかってくるのです。経済的に弱いとなれば、むしろ「活力のしま」とか、「新しいこ

とにチャレンジするネオビジネス」とかいったような表現も考えられるし、そういうことを活かすような言葉の方が、私はよいと思うのです。産業構造と、四国の場合はどうしても他の地域と比べて産業のところまでアグリゲート（集合）されていない。しかし、企業というのは非常におもしろい。ベンチャー的な企業は確かに存在するのですが。道場のようなところがあるわけです。そこで、ベンチャー的なものも含めてですが。もしもそうだとすると、「癒やしときらり輝く」これは好きなのですが、「産業のしま」と言い出したら、先程の川田先生が持たれた疑問というのは非常に同感であって、もう少し工夫された方がいいのではないかと思います。また「四国の創造」というのは、クリエイティブな活動というので非常におもしろいと思います。その意味でも、このタイトルが少し気になるということです。

以上ですが、一通り今日ご出席いただいた先生方からご意見の披露がありましたので、相互に意見交換をお願いできればと思います。あるいは不足した点があれば、もう少し補充していただけたらありがたいと思います。事務局の方から何か反論があったら、いやこういう趣旨でまとめたのだとか、そういう意見があれば遠慮なくご指摘下さい。

○事務局

先ほど、豊田先生が言われました既存ストックの有効活用のことにつきましては、これと並行しまして今、社会資本整備重点計画の中で、社会資本整備を今後どう進めていくかというブロックの重点整備方針を取りまとめています。その中の柱の1つが、今言われました社会資本の高齢化への対応みたいなことで、そちらの方で具体的な取り組みは記載するようにはしております。

○四国圏広域地方計画推進室長（油谷）

川田先生からご意見をいただきました従前の14プロジェクトが10プロジェクトに再編したということですが、内容といいましょうかエッセンスにつきましては、集約再編した中でそれぞれのプロジェクトに従前からご指導していただいたようなものが入っているということで理解をしていただければと思います。その上でこういう再編をいたしましたのは、14プロジェクトということで一度案を作りまして、いろいろお示しをしましたが、色々なご指摘をいただく中で、多少総花的であるとか、並列的であるとか、といったご指摘があったり、あるいはかなり各論的にプロジェクトを構成しましたが、重複関係がいろいろ見られるとかということもございました。また事務局として協議会のメンバーの方々に、ああいった14プロジェクトの箱を作りまして、具体的なプロジェクトの提案を募集したわけではありますが、必ずしもこの計画の中でオリジナルに取り組んでいけるとか、あるいは発展的にやっていけるというようなプロジェクトが、必ずしもご提案いただけなかったプロジェクトもございまして、そういった中でそれぞれのプロジェクトを再編いたしまして、1つ1つのプロジェクトを少し骨太なものにしたいということ。それからコンセプトをそれぞれ明確にして、コンセプトとの関係を明らかにしたいということ。さらにその中で十分至らないところもあるかもしれませんが、できるだけそのプロジェクト毎に新機軸のプロジェクトでありますとか、あるいは特に重点的に発展させていこうというような、非常に目玉商品的なプロジェクトを位置づけたいというような作業をしまして、そういった中で協議会のメンバーの方々と色々な議論をする中で、この10プロジェクトに集約をさせていただいたということですが、今まで直接ご説明する機会がなかったものですから、この場を借りてご説明をさせていただきたいと思います。よろしく申し上げます。

○井原座長

どうもありがとうございました。

あとは、委員の皆さま側の方とで何かご意見があれば、ご提起していただき、相互理解を深めていただけたらと思います。あるいは賛成すること、反対することを、どうかご遠慮なく言っていただけたらと思います。

○坂本委員

私も1つだけ言えなかったのですが、タイトルの「産業」部分にやはり違和感があり、それで川田先生が言われたように、重点が今後の産業創造をしていくためのそこに念頭を置いた議論になるのかなというところ、私も若干感じました。そこで先ほどの2.7%経済、まあ3%経済の中で、この四国をどう位置づけていくか、どう売り込んでいくかという面で私自身も少し違和感があったというところであります。

それと、やはり環境も含め、景観も含め、それはやはりビジネスにも産業にも繋がるわけですが、むしろそちらの方に重点を置いていただきたいと考えています。環境保全とか、そこで出された環境をどう活用し、四国の収益というかそれに繋げていくかという部分は、そこにもう少し力点を置いていくような取り組みが、今後展開できたらありがたいと思います。

○井原座長

サポートしていただいて有難うございます。別の意見があったら、いや間違っているよ、やはり産業政策とかモノづくりだとかそういうことが根幹なのでという意見があろうかと思えます。そういう点、何かありませんか。あれば遠慮なくお願いします。

要は、これはいろいろなプロジェクトがあってそれを集約する、集約の仕方ではどういうふうの特徴づけるか、四国の地域特性をどうやって活性化させるかという点が頭の使いどころだろうという気がします。そういう点で、全体のタイトルをみたときに、本当に四国の地域住民がこれでいいというように情報の共有化が図れるかどうか、経済人であればこれはいいなと言うかもしれないけれど、生活者であれば少し違和感を感じるようなことはないでしょうか。それでは豊田先生、お願いします。

○豊田委員

私もこのタイトルを見て少しどうかなと思いました。16ページに総括文章があって、「地域の強みを活かして」という部分では「癒やしと輝きの国 四国の創造」になっており、「産業」という言葉はありません。私の印象では、癒やされて輝くのは高齢者や青少年を含めた住民なのだろうと思っていました。先ほど井原先生がおっしゃった「生活者の視点」も同じ意味かもしれませんが、ところが、ここで「産業」という言葉が入ってくると、きらりと輝くのは産業だということになります。例えば、わたくしどもの徳島県だったら、輝くのはLEDだろうかと。先ほどからの議論のように、「癒やしと輝き」として、子育てや高齢者の支援、観光振興による地域間交流などを重視するのであれば、必ずしも「産業」に特化した言い方は必要ないのではないかという気がします。

○井原座長

ありがとうございました。あと何かございませんか。またもう一度最後に議論をしたらと思いますので、事務局の方から、経緯などの説明をお願いしますか。

○四国圏広域地方計画推進室長（油谷）

サブタイトルといいましょうか、コンセプト、キーワードのところでございますが、従前までこれを示してなかったのがございますが、計画がこういう最終段階に入ってまいりまして、最終的に各地域の計画も国土交通大臣決定ということになってまいりますので、国土交通本省の担当局、国土計画局との調整にもう入っております。そういった中で、こういったサブタイトル的なものを、キーコンセプトにあたるようなものを付けようという議論になってまいりまして、本省とも議論する中でこういうタイトルになったわけでございます。1つは「癒やし」という言葉で四国のさまざまな文化とか、四国の地域の方々の色々なお接待の心なりに代表するといった四国の方々の、そういったソフトの部分と申しましょうか、そういったものを代表させて、「きらりと輝く産業」というのはやはり人口減少社会、また高齢化社会に入って、それなりの持続的発展を維持していくためには、やはり経済的な基盤というものが重要だろうという認識がございます。

特に先ほどからご意見のありましたように、四国についてはむしろ農業とか、水産業のイメージが強いんでございますけれども、実はそうでもなくて、結構世界的にも技術水準を誇るようなそういった企業もあり、造船業を始めとした産業も立地しているんだというところを、あえてアピールしたいというような意図などもございまして、こういったキーコンセプトにさせていただいた次第でございます。

「しま」という言葉についても、井原先生からご指摘があつてように、実はかなりの議論があつたわけでございますけれども、キーコンセプトをそれぞれの圏域でつける中で、四国らしさというのをキーコンセプトだけ見て、これが四国のサブタイトルじゃないかと思えるようなものを何か特色づけるとすると、この言葉について議論あることは十分本省とも話をしたんでございますが、こういったワーディングにさせていただいたというような経緯でございます。

○井原座長

どうも苦しいことを敢えてご発言いただいて、恐縮しております。本当に共通の理解と認識を深めていくというか、こういう情報を共有化することが決定的に大切です。もとより誤解があつたらいけないので、「しま」というのが逆に四国が島でなくなったと。本州に繋がった半島になった感じとすると、かえって四国の島としての意識とか、四国ならではの島というものが考え方として生き返ってくるのではないかと。それが、海を生かすとか癒しとか安らぎとかいったものが出てくるのではないかと。そういう意味では、「しま」というのは面白いし、「かつこつけ」の独特の意味があると思います。普通の地勢的な周囲が海に囲まれている島ということではないのですよ。瀬戸内海を活かすといったような想いがあつて、「しま」というのは、私は、むしろ評価したいと思うのです。

ところが「産業」というのは一面だけで、どうかなと少し引っかかっております。それも「産業」という言葉が悪いのか、経済学者がこんなことを言うと叱られるかもしれませんが。

それからもう1つ、中橋さんが冒頭話された女性の視点で流出口、帰ってくる人は女性が多いとか、若い人とか、女性の意見が非常に大事であるとか、実は統計をみると、四国の場合、女性の就業者数が非常に高いという特徴がみられるのです。

それからもう少し違った切り口で言うと、女性の社長さんの人数は徳島県がダントツに高いのです。人口当たりでみると、青森県と一番二番を争っていたけれど、今は完全に青森を抜いています。女性が元気で頑張っておられるということは、これからの時代の担い手として、非常に素晴らしいことで、少子高齢化についても、それを逆手にとって強く訴えていくことが肝要です。女性にとっては、一時的に育児であるとか、色々な苦勞もありますが、それでも仕事ができる場所なのですよといったようなPRと、そのようなインフラ整備のあり方についても、もう少し考えてくれたらありがたいと思います。

近藤先生お願いします。

○近藤委員

大した意見ではないですけど、今のサブタイトルで思い出しまして。私がこれを見ていたときに学生がやってきまして、「しま」だけを見て「えっ、四国って島ですか？」っていうのです。彼らが持っている「しま」のイメージは小さい島なんです。私はサブタイトルを見たときに井原先生がおっしゃっている考えと同じような印象を持ちまして、「産業」というのがすごく引っかかっていました。これを何か社会全体のうちの1つの部分と受け止めてしまい、四国はこれだけじゃないという。一方、「しま」についてはどちらかという日本全国で見たときに、これはおもしろいなという印象を持ちました。だから、この「しま」に対して私とか井原先生が持っているような思いを、全ての人が持ってないかもしれないので、これをつけるのであつたらということをお皆さんと共通認識が持てるように訴えていくという、そこがすごい大事だと思いますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

○井原座長

ありがとうございました。また後で議論をしたらと思ひます。

2) 四国圏広域地方計画の進行管理について

○井原座長

もう1つ、只今、計画原案についての意見の披露をしていただきました。もう1つ大事な協議事項としては進行管理ということですので、議事次第の2番目に移らせて下さい。

まず、事務局の方から推進体制、モニタリング等についてのご説明をしていただけたらと思います。

○事務局

[事務局より四国圏広域地方計画計画の進行管理について説明]

○井原座長

有難うございました。ただ今の説明に対して委員の皆様方の方からご意見等ございますでしょうか。先ほどの1番目の計画原案のときに、近藤先生が少し保留されていたので、先に口火を切っていただけたらと思います。

○近藤委員

そうしたら3点、それとプラスアルファが1つになるかもしれませんが。

1点目は、今説明していただいたモニタリングに関するところで、これは計画・政策の評価を行うためのモニタリングという理解で、是非やっていただきたいと思います。今説明していただいたのですが、またあえてという感じで申し訳ないと思うんですが、例えば戦略的取組の4番目に交流の創出というのがあります。交流を創出して促進することというのは地域経済の活性化とか住民の暮らしの向上にすごく貢献することはわかります。そこで大切なことは、それが何故そうなるのかということです。どのようなメカニズムによって、つまり交流政策によってどのように量とか質が変わっていくのか、四国ではどの程度期待されているものか、あるいはもっと一般的に言うと政策として提案したものについて、その影響や効果について分析していく、そういうことがすごく大事だと思うのです。今日モニタリングの説明していただいたので、それをしっかりやっていただいて、そのデータを集めて答えがこうなりましたということと一緒に、なぜそうなったかという過程ですね、そこをクリアにするのはすごく大事だと思います。というのは、そのような知見を蓄積すると、次の政策提案をするときにどんどん有効に使えらると思います。だから、結果だけ見てどうのこうのというのも大事ですけど、中身を是非やって欲しいと思います。そういうことができるような体制づくりについても、進行管理の中で入れていただけたらという気がします。これも余談になりますが、今回の高速道路1,000円の政策がありましたけど、四国で見ると交流という意味からしたらすごくたくさん人が交流しましたが、それでどうなったのということがあります。観光客はたくさん来てくれてよかったのですが、例えば買い物で流出したのか、あるいは高速道路で大渋滞が起こって、これは大きな損失だったのではとも思うんですけど、そのあたりのことも政策の評価というところで是非お願いしたいと思います。それが1点目です。

2点目は、先ほど豊田先生の話で少しありましたが、大きな社会問題の1つに地球温暖化問題というのがあります。ここにも部分的に書かれているのですが、これから計画を実行していく上でこの問題が大きくなってくるような気がします。今は政府で、次の2020年の削減目標どうするかという話をしていますが、このことは計画全体にかかわってくると思いますので、どこかでやっぱりこう、皆さん意識してやられると思うんですけど、注意しないといけないなというのが2点目です。

3点目は、今度の計画で新たな公という大きな特長が出されているのですが、本当にこれは地域にとってプラスの活動で非常に私にはいいと思っています。色々なNPOとか市民団体が一生懸命やってるんですが、ある種の部分最適化がされていくと思います。そして、それらを総合的に最適化するにはどうしたらいいかというのを考えることが次の課題だと思います。総合的に最適化するためには、誰かが上手くコーディネートしていく必要があるような気がしますので、その

あたりも、計画を進めていく過程の中で考えていく課題かなと思っています。

あとプラスアルファですが、コミュニティの重要性っていうのを最近すごく感じていまして、徳島県の上勝町、人口約 2,000 人で、高齢化率が 50%で、元気です。例えばゴミの 34 分別なんかが上手くできるのは、各家でやらず、コミュニティがしっかりしていますから高齢者の皆さんを協力してゴミステーションまで運んでくる。また、人口の U I J ターンというのがありまして、ここにも書かれていますが、地域に入って U I J ターンの経験者の話を聞きますと、やはり生活をスタートする時の家探しとか、あるいは色々な生活の問題について、相談に乗ってくれる人がいると上手くいっていると聞くんです。それもコミュニティだと思いますので、それをいかに育てていくかというのも一緒に計画を進めながら、実行していかないといけないと思っています。

○井原座長

3 点ほど雇用の創出にかかる要因分析と、それから地球温暖化に対する評価、あるいは新たな公についての具体化、そういう 3 点プラスコミュニティの活性化について、いわゆるアドバイザーというかそういう相談をきちんと真摯に受ける人をどうするかという貴重なご意見だったと思います。

先程は、一番最後に言っていたので柏谷先生、お願いします。

○柏谷委員

資料-4 にありますような連絡調整会議のようなものを作られて、進行管理をされるということはいいことだと思いますが、このプロジェクトだけかもしれないが、こう見るとやはり四国の中の人たちだけで集まっているわけです。やはり外部の人の意見というのは反映していただきたいと思います。観光についてですが、四国でも「観光をいろいろやらなければいけない。」とか、あるいは「うちの村にもこんないいところがある。」とかいって結局お国自慢になりかねないです。一昨年わたくしども国土計画調整費をいただいて、ヒアリング調査をしたら、首都圏の人には、四国は完全に視野に入っていないのです。これは個人的にもそう思います。私も時々見るのですが、東京の方に行ったら旅行パンフレットを見るときに、北海道は一行、九州も一行です、沖縄も一行です。四国はどこにあるかと探しますけどなかなかありません。全然ないのではないかと思うとそうではなくて、中国・四国と書いて四国が隠れて見えなかったりすることがあります。それぐらい無視されてるといえるか、関係ないといえるかそういう状況が残念ながらあるわけです。これは印象論だけではなくて、官公庁が行っている統計などを見ても関東地方から四国に来る割合は 1% に満たないんです。九州とか沖縄とかは 1 割ぐらいあるわけです。それぐらいやはり少ないので、そういうものを四国の中の人間だけでやると、「うちがいいんだ。あそこがいいんだ。」みたいな形になって、ミスリードしてしまうのです。だから、今から外部から人に来てもらうのもいいかもしれないし、どこかでデータを集めてそのデータを反映するのでもいいですが、外部の意見を反映させるようにしていただけたらと思います。

○井原座長

これは貴重な意見、有難うございました。

それでは、川田先生お願いできますか。

○川田委員

先ほど申しましたけれども、生態系の問題の特に四国圏の生態系の保全というような問題が、どうも緑の島四国の森林共生プロジェクトの中に組み込まれているような感じがしておりますので、本来目的コンセプトの 1 つにこの生態系の保全というのは入れるべきじゃないかという気がしておりますので、もしこれからモニタリング指標例を検討する場合、四国の美しい森づくりというのは、それは 1 つの課題もあろうと思いますので、生態系の保全というのを目的コンセプトの中に入れていただいて、それに対応するアウトプットなりアウトカム指標を検討していただきたいと思います。本来なら本文の中に 1 つ項をおこしていただきたらという気もしますが、これは先ほど議論して終わりましたので、四国の森林共生のところの美しい森づくりといえますか、

その中に全て入ってしまったものですから、一行あるいはキーワードとして入ってるだけなので、少しそこが気になっていたものですから。

○井原座長

以上でよろしいですか。

何だか、川田先生は控えめですね。私ならリクエストして、リクエストして、ノックダウンされても頑張りますが、やはり配慮が違いますね。頭が下がりました。しかし、生態系の問題などは、四国ならではの特色がありますから。それに対してももう少し出されて、イメージ的に強調されることがよいのではないかと思います。

あと坂本先生何かございますか。

○坂本委員

私も、ほとんど近藤先生が言っていたかまして、今回、今日の会議で一番言いたかった部分はその部分です。モニタリングのところの評価の部分だけしかありませんが、確かに外部意見を聞くということ、私もやっていただきたいと思います。柏谷先生が言われるように、それもやっていただきたいし、一番今までいろいろなプロジェクトで過去何十年もやってきて、成功させてこられなかった理由というのは、むしろ地元に住んでる人との十分な自己認識が十分にできていないところではないかと思います。そのためにも是非四国内で最初のところでも言いましたように、例えば四国のシンクタンク機能的なものを作って、自分たちでモニタリングの評価をしていく。今回のモニタリング評価の結果というのは多分この資料-4の裏にありますように、全国のブロック間比較分析に活用するとありますから、そういう活用になるとは思いますが、当然大きいブロックとは数字的にいくら出ても件数、定性的な数値でいうと必ずしも十分ではないような指標が出てくる。そのための分母部分を我々が評価して訴えていかない限り、もう1つ四国に住んでる人が自らそれを評価しない限りたぶん成功させられないと思います。そのような仕組みを是非作っていただきたいし、結果的なアウトプット指標というモニタリング指標例、これはまだ未定稿で完全じゃなくてこれから検討されると思いますけど、とにかくやってるうちは数値目標達成必達になってしまって、それを達成することが目的になってしまう。そうではなくて、この数値を達成することがどういう効果を及ぼすのかということ、事前に評価基準を少し明確に作っていただいて、こういう評価基準でこういう数値目標を達成することによって、例えば四国の経済産業はこう変わっていくという部分を、もう少し明確に四国内で作り上げる必要があるのではないかと思います。そういう意味でシンクタンク的な機関というか、そういうグループがいて、自ら評価していく必要があるのではないかと思います。以上です。

○井原座長

有難うございました。

それでは、中橋さんどうぞ。

○中橋委員

この進行管理の資料見せていただいて少し感じたんですけども、今四国の中で、その地域の課題解決に取り組もうということ、取り組んでいるNPOであるとか、企業も社会貢献だけではなくて、CSRだけではなくて事業として、ビジネスとして取り組もうということで、コミュニティビジネスであるとかソーシャルビジネスに取り組んでる団体が非常に増えていますし、経済産業省も今それを支援しようということで、四国経産局もコミュニティビジネス支援に熱心に取り組んでおられます。少子高齢問題であったり、環境だったり、医療だったり、食だったり、観光だったりということで、それぞれのコミュニティビジネスの団体があるのですけれども、経済産業省が去年あたりから、地域ブロック毎にネットワークをしようということで、同じように四国にコミュニティビジネスのネットワーク化を去年旗揚げをしたかと思いますが、実はあまり上手く機能をしていません。アンケートなどを私たちのような地域の実現場で活動しているコミュニティビジネス、ソーシャルビジネスの団体に行っているようですけども、私のところにそうい

う小さいグループからよく連絡があって、あのアンケート送ってきたけれども、あまりに現場の実態にそぐわないし、あまりに関連性がないとか親しみのない団体からアンケート送られてくるものですから、すごく適当に答えていたり、「もう答える必要ないよね。」とかっていうようなことを言っている団体もあります。アンケートに答えたり、意見を言うことも1つの作業なわけですが、皆知ってる団体に頼まれると答えようとか、意見が反映してくれるだろうと思えば熱心に答えるんだらうけども、あまりに知らない、縁のない団体から聞かれると、本当の本音の部分を語ってくれていないと感じます。同じようなことにならないように、この連絡調整会議も民間団体が四国経済連合会であったりとか、お遍路さんのNPOだったりとか、あんまり現場の人たちに顔の見えるとか親しみのあるところかというところ、現場で少子化問題であったり、環境だったり、医療だったり取り組んでいるところが積極的に係わりたいとか、よく現場の顔が見えているところから少し距離があるような気がするの、どうそこを落とし込んでいって、本音の部分でこのモニタリングであったりとか実態実況調査みたいなものができるかというのは難しいなと思います。そのためにはまずは国だけではなくて、県が動く、あるいは県内の市町が。だから経産省のコミュニティビジネス支援も経産局はやっているけれども、あまり県の商工労働部は把握していない、連携があまりとれていない。まして市町の商工労働の担当課になると、「そんなのやってるの、へえ。」ぐらいなもので、聞くと全然連携がとれてないということを非常に強く感じました。同じようなことにならないようにやっていただけたら、現場としても声を出しやすい形、吸い上げていただきやすい形になればいいなと思いました。以上です。

○井原座長

有難うございました。それでは最後になりましたが、私も意見を言わしていただけたらと思います。ただ今の中橋さんのお話を聞いて、連携というのはやはり四国が範を示すようなよいキーワードだと思いました。それぞれ役割を分担しながら、立場の交換をしながら共同で仕事をするというのは、非常によいことだと思います。それは柏谷先生がおっしゃった四国の内部の人だけではなくて、外部の人を入れてはどうするかについても考えることかと思えます。九州とか北海道と比べて、四国もやはり島ではあるのですが、決定的な違いは、四国の人には四国のなかでのモビリティが相対的に少ないのです。むしろ外へ出て行く。島外流動が相対的に多いのです。例えば、北海道は北海道のなかで札幌を中心とした一極集中的なものがある。九州も福岡を中心としたものがあるが、四国は完全な分散型で、しかも島外へ出て行っている。それでどう一体化して、島の意識を再考するかということは難しいと思うのですが、それでも是非ともやってもらいたい。何故かといえば幾つかその理由があるのですが、冒頭、局長のお話しによると、中国との合同の協議会が7月に開かれると聞いたときに、それでは中国と四国を比べたらどこが違うかと問われると、私のかつてのエコノメトリックスを教えてもらった馬場正雄先生の戦友であるといわれる司馬遼太郎が取り上げているのは、すべて四国に限られているのです。中国地方については一切ないといわれます。したがって、四国は非常に多様性に富んでいるのです。事実、中国地方は山も違うし、老成化されている。そのような四国の特徴づけがわかるのは、他の地域との比較によるものです。観光にしても、ただインバウンド的な外の人だけを呼び込むのではなくて、四国の人々が本当に四国のなかでモビリティを大事にするような生活慣行といえますか、自分のところを誇りに思わないようなところは、たとえ人を呼んでも来てくれないし、通り過ぎるだけなのです。要は、新たな「四国人」という意識も登場して、リージョナル・アイデンティティとして確立すべきという意見もありますので、やはり四国のなかでもう少し交流を高めることが肝要なのです。例えば、NHKの大河ドラマでこのほど、「坂の上の雲」が取り上げられますが、それも松山から出て、北海道やモンゴルなどでロケを行っています。したがって、そういうこと考えると、開かれた形で、外から見たかたちでの四国の位置づけを考える必要があります。そういう視点が「開かれた地域」(オープンネス)というのは、北海道とか九州ではない四国の独自性なのです。そういうなかでの1つのアイデンティティとか、「四国はひとつ」という意識について、是非ともそのような意識を共有化するように努めていただけたらと思います。

それでは一通り予定しておりました議題で計画原案と進行管理については、以上で終わらせて下さい。もとより、何かありましたら、後ほど、また事務局の方にご意見等をお寄せ下さい。

3) その他

○井原座長

3 番目の議事内容でその他がありますが、何かアナウンスメントがありますか。

○事務局

参考資料－1 に今後のスケジュールを付けておりますので、これについて簡単にご説明したいと思います。この下面の平成 21 年のところから見ていただければと思います。本日、5 月 28 日第 3 回学識者会議を開催したところでございます。とりあえず学識者会議につきましては、本日で一旦終わりにしたいと考えてございます。この後ですが、先ほど私どもの局長が話がありましたように、6 月 8 日に第 2 回四国圏広域地方計画協議会を開きまして、その後法定のパブリックコメントを6月中旬から7月中旬ぐらいまでの約 1 カ月行う予定にしております。その間に7月8日に第2回の中国圏四国圏合同協議会を行いまして、最終的に広域地方計画案をとりまとめたいと考えております。概ね順調にいきましたら、今年の夏頃を目処に決定までいければと考えております。以上で説明を終わらせていただきます。

○井原座長

どうも有難うございました。何か他にご意見ございますか。

それでは、本日のご意見に基づき事務局の方でもう一度論点整理をしていただいて、適宜、取捨選択をしていただけたら有難いと思います。それでは事務局にマイクをお返しします。どうも有難うございました。

3. 閉会

○四国圏広域地方計画推進室長（油谷）

たくさんの貴重なご指摘、ご意見誠にありがとうございました。今後の計画の策定作業の中で、また計画策定後の具体的なプロジェクトの実施方策、また進行管理の中で反映させていただきたいと思っております。本当にありがとうございました。これにて第 3 回四国圏広域地方計画学識者会議を終了したいと思います。